

巻 頭 言

本論集は、京都大学東南アジア地域研究研究所 CIRAS センター共同研究課題「ユーラシア国境域の自然環境と境域社会の生活戦略」の成果報告として編集されたものである。また、この共同研究課題の参加メンバーは、JSPS 科研費（挑戦的研究（萌芽））「冷戦終焉とユーラシアの境界・環境・社会：グローバルな比較と理論化に向けた学際研究」（課題番号：17K18531、研究代表者：花松泰倫）の分担研究者を兼ねており、科研研究プロジェクトの成果報告の意味も兼ねている。まずは、プロジェクトへのご支援をいただいた、京都大学東南アジア地域研究研究所 CIRAS センターおよび日本学術振興会に深甚なる謝意を表したい。

本論集に収録された各論考は、ユーラシア各地（東南アジア、南アジア、北東アジア、中央アジア）の物理的境界（国境など）、社会的境界（民族分布など）、自然的境界（地形や河川流域など）の「ずれ」に着目し、ユーラシア各地の「境界」と境域「社会」と「環境」がどのように変容してきたのかということ、「ずれ」を意識しつつ境域社会の側がどのような生活戦略を立てているのか、ということ論じている。国境と民族分布の「ずれ」や（それにとまなう）人々の越境については、ボーダースタディーズ（境界研究）や移民研究などでしばしば取り上げられてきたが、そこに「環境」という要素を加味した点が新しい。境域というローカルな地誌を記述しつつ、国家やグローバルなアクターなど、様々なスケールの境域での相互作用や影響関係についても視野に入れている。いわば、「比較境域地誌学」の論集のようなものだと考えていただきたい。境域と境界の「ずれ」と、境域へのマルチスケールな影響については、次頁の概念図を参照願いたい。今回は、あくまで「ユーラシア国境域」と、地理的範囲を限定しているが、このアプローチでの研究は、グローバルなスケールでの比較が可能だと考えている。

しかし、2020年2月から本格化した新型コロナウイルスのパンデミックにより、京大のプロジェクト期間中にメンバーは国外調査に赴くことはできなかった。よって、あくまで前年度までに実施したフィールドワークの結果にすべての論考が依拠している。パンデミック下での今後の研究展開について考えてみると、しばらくは本格的な国外でのフィールドワークの実施は難しいだろう。それでも、流行状況のタイミングによりけりではあるが、日本国内の国境地域を訪れることは不可能ではないし、都道府県や市区村長の境界地域というものを措定してリサーチすることも可能だろう。「できる範囲での」今後の研究展開にご期待いただくと共に、本論集が境界研究や地域研究の一つの新しいかたちとして何かしらの知的刺激を読者の皆さまに与えることができるならば、それは望外の喜びである。

2021年3月21日

編 者

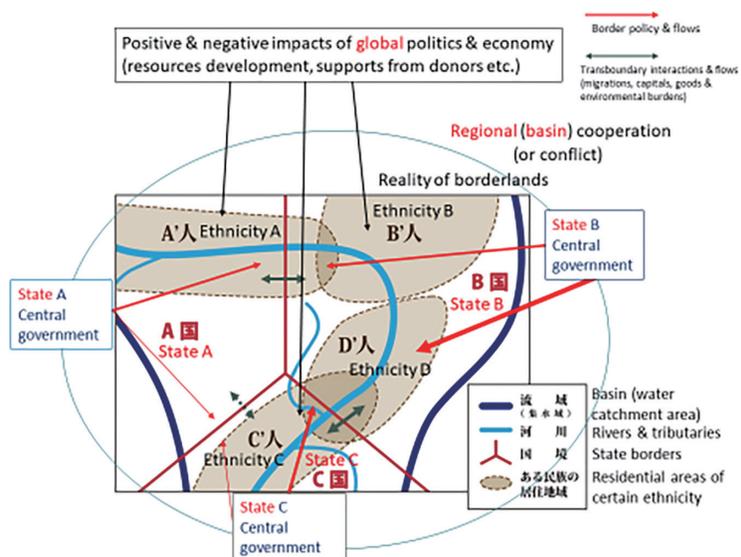


図 境域と境界の「ずれ」と境域へのマルチスケールな影響